

秋期大会（1992年11月28日）

『理想の夫』の主題と手法

千代田 友久

（立教大学講師）

『理想の夫』はロバート・チルターン、ガートルード・チルターン、ゴering、チェヴァリー夫人の4人を中心として劇が展開して行く。キャヴァッシュ伯爵は彼らの騒動に巻き込まれることがなく彼らとは一定の距離を保っている。彼はゴeringに結婚のことでさかんに小言を言うが、それだけが彼の役割ではない。この芝居の幕が近付いた所で彼は「だがもしこの若いご婦人のために理想の夫にならんかったら、1シリングでお前を廃嫡にするぞ。」と言う。彼の台詞の中の「理想の夫」という言葉がこの芝居の題になっていることを考えると、彼の役割は小さなものではないと思われる。

さて、この芝居では「みせかけ」と「実体」が大きな意味を持っている。これを芝居全体の流れに沿って見て見よう。

1幕ではチェヴァリー夫人がロバートを彼の若い時の過ちを武器に脅迫する。観客はロバートの「若い時に内閣の秘密を売った男」という「実体」を知ることになる。

2幕ではロバートの告白を聞くことでゴeringがロバートの「実体」を知ることになる。

3幕ではゴeringとチェヴァリー夫人の対決を見ることによって、観客は「怠け者」とは正反対のゴeringを見ることになる。

4幕ではロバートはゴeringが彼を危機的状況から救ってくれたことを知る。ゴeringが信頼にたる人物であることがわかる。ゴeringの「実体」がロバートにも明らかになる。

この芝居の中でいつ、だれが、だれの「実体」に気付くのかということを知ると、ゴering、観客の三者について調べてみると、幕ごとにある者の「実体」を別のだれかが知るという構造になっていることがわかる。

この芝居の閉幕が近付いた所で、観客はロバートとゴeringの「実体」を知り、ロバートとゴeringはお互いの「実体」を知ることになる。ここにキャヴァッシュ伯爵が登場してきてゴeringに「理想の夫」になれと言う。相変わらずロバートとゴeringの「実体」がわからない伯爵の姿を観客は見るわけだが、これは何を意味しているのだろうか。すでにロバートとゴeringの「実体」を見た観客はキャヴァッシュ伯爵の台詞を聞

くと次のような感想を持つことになる。ロバートは必ずしも理想的な人物ではない。ゴeringは必ずしも怠け者ではない。理想的な夫とはどんな人物のことか。伯爵はどんな人間を念頭に置いて「理想の夫」という言葉を使ったのか。そして、もし伯爵が事実を知ったとしたらどうなるだろうか。すなわち、ロバートとゴeringの「実体」を知ってもなお「理想の夫」という言葉を使うだろうか。この芝居はロバートとガートルードの家庭がその崩壊の危機を脱し、ゴeringとメイベルが結婚することになりハッピーエンドとなる。その中でキャヴァッシュ伯爵の言葉は観客の苦笑を誘うだけでなく、人間の奥行の深さを気付かせるものであり、この芝居において重要な役割を果たしているのである。

次に、メイベルの理想の夫にならなかつたら勘当するという伯爵の言葉に対するゴeringの反応を考えてみよう。彼は反発するだろうか。あるいは、ロバートの秘密を父親に暴露するだろうか。彼はどちらもしない。舞台の上で沈黙を保つ。彼が沈黙することによって観客は彼の心の中のみそかなつづやきを聞くことができる。すなわち、「過去の過ち」は完全に無視してよいことではない。しかしそのために一人の人間の現在と将来の人生までが破滅してよいことにもならない。可能な限り慈悲の心を持つことが大切だ、と。そして、これは同時に作者ワイルドの「過去の過ち」に対する考え方を垣間見せてくれるのではないだろうか。

このように考えてくると、キャヴァッシュ伯爵の「理想の夫」という言葉はこの芝居が深い余韻を残して終わることを可能にした重要な言葉であったと言えることができよう。

『ドリアン・グレイの肖像』と世紀末

新井 透

（名古屋国立女子短期大学）

オスカー・ワイルドは『ドリアン・グレイの肖像』で美に対する尽きることのない願望と、人間の心の奥にある魂の深淵を描いている。主人公ドリアンはデカダンスや唯美主義、あるいはダンディズムといった19世紀末の精神風土を体現している。またベーターの『ルネサンス』（1873）の影響は大きい。特にヴィンケルマンのギリシア美術についての引用や、ミケランジェロの絵画、彫刻に対する言及で、男性の肉体美に至上の美を見出しているベーターから、ワイルドは多くのことを学んでいる。たとえば「優雅はかれのものであり、少年らしいあの純白も、古代ギリシアの大大理石がとどめてくれるような美も、かれのものだ」とヘンリー・ウォットン卿はドリアンのことを語っている。